報告

続 私の戦争体験記
三浦海岸の陣地構築

林　寅喜
（会員　佐伯市中の島町）

『はじめに』

この手記を書くにあたり、記憶違いは正して置きたいと考えて、要点に図四を添えて三浦市教育委員会に照会したところ、社会教育課文化財係の飯島さんから、資料と地図に写真までつけて返送して頂いた。そこでこれを参考にしながら記憶をたどり、書き綴って見ることにした。

なお、返信して下さった飯島さんに対し、紙上を借りて厚く御礼申し上げます。

(一)築城分隊編入

昭和二十年春戦局は益々熾烈（しれつ）となり、大本営では来るべき本土決戦に備えて全国至る所に陣地を築かせ、防備を固めていた。中でも三浦半島は首都圏防衛の要（かなめ）として最重視されていた地域である。ことに米軍の上陸地点と目された三浦海岸（現三浦市南下浦町と横須賀市長沢地区〈旧北下浦村〉）には、海軍工作学校の普通科練習生を築城分隊に編入して陣地（トーチカ）の構築を命じた。このため三ヶ月の新兵教育は二ヶ月で切り上げられ、三月下旬か四月初めに、現地入りして作業に従事することとなった。そこで以下記憶をもとに先ず陣地の全体像から説明して見たい。

三浦海岸は三浦半島の突端に位置し（図一参照）、東京湾の入り口に面した弓形（ゆみなり）の遠浅が続く半農半漁の村で、半島の東端剣崎を廻った集落岩浦の北端から野比まで、延長およそ八キロである。その

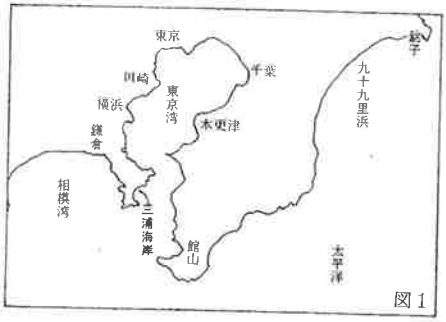


図1

真裏に当たる相模湾側(図二参照)はリアス式海岸線が続き、上陸の可能性はないと判断していたのかも知れない。

この海岸線上におよそ五百メートル間隔で十六ヶ所(記憶違いがあるかも)のトーチカを構築するのが築城分隊の使命であった。

註(一) 頂いた図二には九ヶ所の陣地跡しか記録されていない。しかし、これではA・B間の距離が空き過ぎて矢印の部分が死角となり、突破口とされる危険性が強い(図三参照)。

私の記憶ではこの間にも幾つかのトーチカが構築されていたと思っている。

海岸全景　三浦市教委飯島さん撮影

飯島さんによれば現存しているトーチカはなく、数の確認は出来ないが岩浦寄りの岸壁には銃眼口が二ヶ所だけ残っていると言う。

(二)現場作業

動員されたのは普通科練習生二箇分隊六百人の志願兵と、一箇分隊の補充兵であったと思う。(或はもっと多かったかも)。

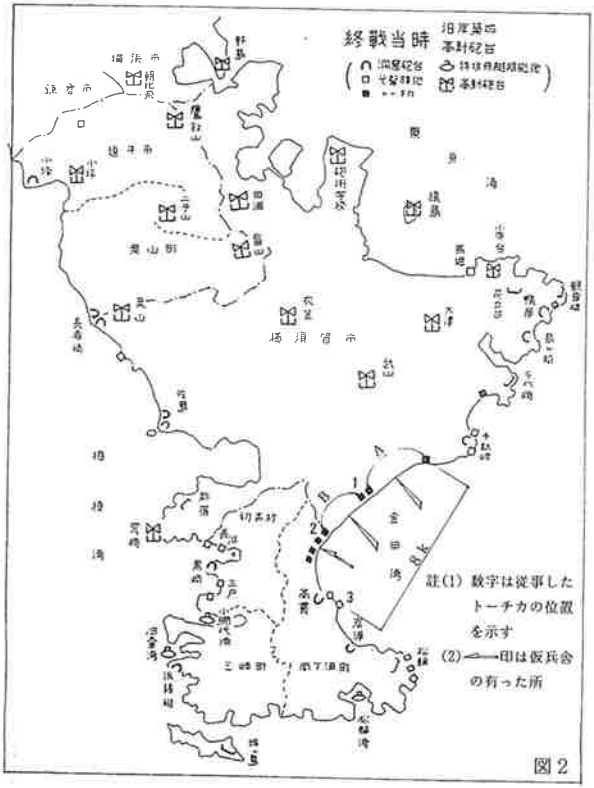
私の所属していた第五十八分隊は直接現場作業に就いたが、資材運搬に編入された別の分隊では、砂・砂利やセメント・鉄筋等満載したトラックに引き綱をつけ、久里浜から野比の峠を越えて現地まで毎日往復していた。それはガソリンの不足を補うための人海戦術でもあった。

一方、補充兵は『シャバ』(一般社会)では職人として働いていた人達が多かったからか、鉄筋組みや仮設作業等が主であったように思う。

五十八分隊が何ヶ所に分散して作業したか記憶にないが、私が最初に行った現場は北下浦小学校の近くにあった。そこは人家に隣接した畑の横で海浜に近く、土手の

ように盛り上がっていたが地質は深く砂層であった。

業務内容は床掘り・基礎工及び進入路の仕上げまでで、作業は直径十メートル前後を深さ二メートル以上も掘り下げ、所定のレベルに達した後栗石を一定厚に敷き詰め、その上に未口三十センチ長さ七メートル程度の生松丸太を一内至一・五メートル間隔で格子に組み、これを軸にして主鉄筋を立て、間詰栗石を充填して基礎コンクリートを打設する（図四参照）。そこまでが私達の作業工程であった。なお、床掘りは砂質のため度々崩土があり、その都度補充兵が来てパネルや矢板で防いでくれた。その頃南下浦の海浜にトタン葺きの仮兵舎が完成してこれに移った。建設したのは補充兵分隊である。



三浦半島城郭史（下）より転載

註(二) 仮兵舎の位置は頂いた地図から判断すると、今井川の河口附近ではなかったかと思う（図二矢印の位置）。

仮兵舎に移ってから現場は南・北下浦の村界近くに構築中の陣地に変わった。そこも民家に近く波打ち際まで六、七十メートルもあったろうか、高低差は大分あった。屋敷内は軍専用のように出入りし縁側は常時使用していた。何という家か名前は覚えて

いないが、国のためとはいえ迷惑であったと思う。

作業は躯体部分のコンクリート打設と進入路の掘削、並びに支保工の枠組み等であったと覚えている。

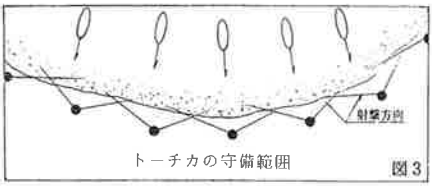
コンクリートの打設は古枕木で足場を組み、その上に七・八才練り(一才は一立方尺)ミキサーを据え、配合比に合わせて松板で箱を作り(ザルは使わなかった)、これを容器として砂・砂利を擔ぎ上げたが、箱だけでも重い上に骨材が加わるため、約一〇〇立米(図により算出)もの打設は、丙種で取られたひ弱な躰には相当応えた。

午後三時の休憩時には給食として雑炊が支給されたが、季節柄浜風が砂を吹き上げ、当番が運ぶ途中か配食中に混入するのか、毎日ジャゴジャゴした雑炊を食わされて、よくも盲腸炎に罹らなかったと思った。

トーチカの鉄筋組みや形枠組み、骨材運搬用の箱作り、ミキサーの足場掛け等は補充兵が担当し志願兵が補助していた。ここではミキサー設備と併行して鉄筋組みも行われた。鉄筋はトーチカの前半分に19内至21ミリを約二十センピッチで格子状に復筋で組み、外筋の内側にはアングルの50×60位を千鳥に建て込んだ三重の配筋であった。その頑丈さには驚きであったが、据えられる機銃は口径21ミリ(19ミリだったかも)二挺と聞いて、莫大な資材と労力を投じたにしては兵器が貧弱であると失望したが、上陸阻止の場合殺傷力は砲より機銃が有効であると言い、緒戦に受ける艦砲射撃や、爆撃による一トンの直撃弾にも耐え得る設計と聞いて、納得したものである。

作業はコンクリート打設等特別な場合を除き、交代制で現場はフル回転したが、休憩は十五分位だったと思う。北下浦では休憩所が浜辺にあった。と言っても小さな小屋に過ぎなかったが腹が減って仕方がない。そこで波打ち際まで出て打ち上げられたものを拾い集め、教班長に見られぬ様にしながら焼いて食った。中でも昆布(?)の根っ子部分は塩味が効いていて美味かったと覚えている。

また、ここでは小学校を仮兵舎にしていたので風呂はなかった。そこで少人数に別れて民家に貰い風呂に行



トーチカの守備範囲　図3

く。民家では果物など出してくれたが、食糧難の時代だけに精一杯のサービスであったと思う。それよりもお礼に有難くないシラミを置いて行かれはしないかと、ハラハラしていたのではないかと後で思った。

仮兵舎の浴室は下士官室の前にあり、十人位で順次入浴していた。何班か覚えていないが或る夜消灯後の入浴中に騒いだといって『バッタ』(詳しくは一八一号P28参照)を喰らい、翌日現場で紫色になった尻を摩っていたが、制裁は時と場合を問わず行われ、北下浦では『バッタ』を一度に七本も喰らい、顎をぶっ飛ばされたこともあった。断わっておくが海軍では個人よりも班とかグループ全員の制裁が多く、それは一致団結を至上命令とした連帯責任が厳しく問われていたからである。

一方、天気の良い日に限り砂浜に毛布を干してシラミ退治をした。

余談になるが今の人達はシラミや南京虫など見たことはないと思う。シラミ(コモロジラミ)は灰白色で一見透き通って見え、サソリに似た(私はそう思っていた)形をしていて、大きいもので四ミリ位もあり、蚤のように素早しこく飛び廻ることはないが、昼間は衣類や毛布の縫い目とか皺の間にひそんでいて、夜になるとモソモソ出て来て人の血を吸う。これに再三食われると掻き毟った後の傷口が悪化して出血し『カサブタ』のようになる。私は入校後真っ赤に血を吸ったシラミを見て身震いしたが、自分一人で注意してもどうにもならず、終いにはあきらめてしまった。そのシラミも太陽の直射には弱かったようである。

最後に行った現場は南下浦の菊名という所で、最南端の陣地であったと思う。そこから先は砂浜などなく岩肌が突き出て直接波に洗われていた。銃眼口(写真参照〈但し作業に従事した場所とは違う〉)は一眼で岩盤を刳り貫いて設け、三、四十メートル離れた人家の裏山からL字形の小さな導坑で結んだが、これを穿つのが私達に与えられた主な作業であった。土質は軟岩層俗にいう『麦トボ』で支保工の必要はなかった。この導坑は今でも残ってはいないかと思う。作業は狭い坑内でツルハシを振るため十人位で五分置きに交代した。それはこれまでのうち最も楽な作業であった。外に鉄筋曲げなどした記憶はあるがあとのことはよく覚えていない。

仮兵舎は近くの寺であった。何という寺か覚えていな

かったが、本堂への上がり口が立派な石段であったと書いて送ったら、飯島さんの調べで円福寺ということが分かった。こうして建設作業が概ね完了した五月下旬、全員所轄の海兵団に転属となり工作学校に引き揚げた。

(三)東京大空襲に遭う

五月二十五日夜、佐世保に帰るため久里浜を発って大船まで来た時、空襲に遭って駅裏の防空壕に避難した。壕の上丘陵地には慈母観音の立像があった。米軍機は鎌倉上空から横浜・川崎を経て東京の上空に達し、爆撃のあと右に旋回して木更津の方向へ去って行く。この夜は先発の三機が東京の上空一万㍍から照明弾を落として市街地を昼間のように明るくした後、後続の編隊B29が続々と侵攻して来て爆弾・焼夷弾を投下する。これを狙って高射砲や高角砲が撃ち上げられるが、弾は届かず空中で炸裂するばかり、見ていて何共情なく眼下の東京は全市火の海であった。

このように燈火管制も何人等役に立たず、その上我が方は為す術もなかった。後で聞いたがこの式の空襲を『油揚げ型戦術』と呼んでいたとか。

翌々日だったと思うが早朝徳山駅を通過した時、線路脇に倒れた多くの死体を見て胸の塞がる思いをした。佐世保に到着したのはその夜遅くであった。

『あとがき』

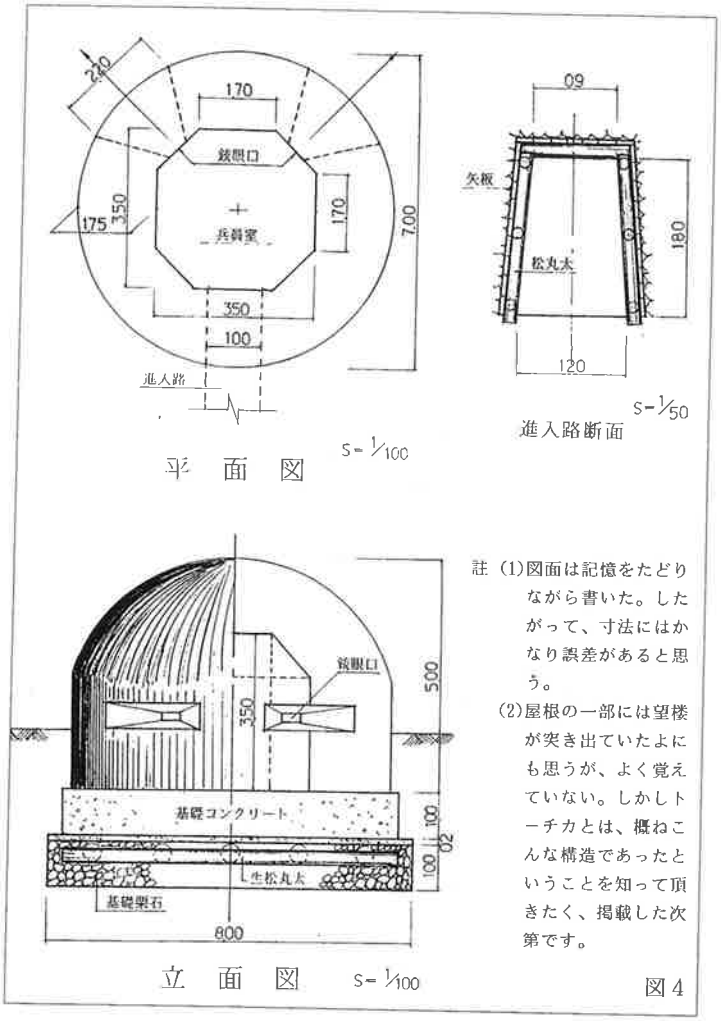
戦争が終わって五十五年になろうとしています。今は平和を謳歌して言論の自由を保証され、物資は使い捨ての恵まれ過ぎた世の中に変貌しましたが、青春を奪われて一途に勝利を信じ、国のため身を賭して尽した十九歳は再び戻ってくることはありません。

構築に従事した三浦海岸のトーチカも幸いにして使用されることなく敗戦を迎え、戦後は壊そうにも容易(たやす)く壊れぬ厄介な代物となったであろうことは想像に難くありません。

戦争は相手国を倒すために国力を傾け、

岩壁に掘られた銃眼口
三浦市教委飯島さん撮影

国中を焦土と化して国民の生命と財産を奪い、膨大な金と物資を惜しげもなく浪費する。こんな愚かな政治は二度と許してはならないと思う今日この頃です。



註 (1)図面は記憶をたどりながら書いた。したがって、寸法にはかなり誤差があると思う。

(2)屋根の一部には望楼が突き出ていたようにも思うが、よく覚えていない。しかしトーチカとは、概ねこんな構造であったということを知って頂きたく、掲載した次第です。

図4